

JSPS Stockholm Newsletter

Vol. 49



Prologue 01

カロリンスカ医科大学 (Karolinska Institutet)

News 02

Issues of Recognition in Pragmatism and American Transcendentalism の開催/スウェーデン同窓会総会、10周年記念イベントの開催/スウェーデン同窓会セミナーの開催/在スウェーデン日本国大使館新年会への参加/2015年度第3回KVA-JSPSセミナーの開催/Japan Alumni Forum 2016/デンマーク同窓会幹部会、設立総会、Japan Alumni and Researcher Assembly 2016

Reports 06

IVAセミナー: "The future forest industry - What could Sweden learn from Japan?" / 流動ダイナミクスとスピントロニクスに関する国際ワークショップの開催/ヘルシンキ大学での国際会議報告/JSPS-Linköping大学共催セミナー/その他打合せ・来会等/コラム～イースターの魔女～

Academic Information 14

スウェーデン: 第6回日スウェーデン科学技術協力合同委員会開催/スウェーデン: 高等教育と雇用/スウェーデン: スウェーデン王立工学アカデミー (IVA) が中西友子東京大学教授を会員として選出/スウェーデン: スウェーデン国王カール16世グスタフ陛下、スウェーデン王立工学アカデミー (IVA) の科学技術代表団と共に訪日/フィンランド: 第6回日フィンランド科学技術協力合同委員会開催/フィンランド: 研究基盤のデータバンクが開設/フィンランド: 研究結果活用促進のための資金提供プログラムが2016年4月に募集開始予定/ノルウェー: ノルウェー科学技術大学とベルゲン大学、日本での活動を強化/ノルウェー: 高等教育機関の統合/ノルウェー: Quota Schemeに代わる新プログラムの開始/デンマーク: Horizon2020より3億ユーロ獲得/デンマーク: Klaus Bock教授が欧州研究評議会 (ERC) のVice Presidentに就任/ラトビア: Karlis Sadurskis氏が教育・科学大臣に就任/KI Bladet

Notice 20

イベント予定
事業のご案内
カロリンスカ医科大学 (Karolinska Institutet) 同窓会会員募集
JSPS Stockholm Newsletter 定期購読

カロリンスカ医科大学(Karolinska Institutet)

JSPSストックホルム研究連絡センター長 阿久津 秀雄

スウェーデンは近代化を進める上でローマ文明の導入を重視した。ここで大学は重要な役割を果たした。スウェーデンの文明開化はキリスト教化に始まる。北欧最古の大学であるウプサラ大学は1477年にカソリック教会主導の下に設立された。しかし、グスタフ1世バサーが新教に改宗したことにより大学が担う学術は宗教に縛られなくなり、総合大学として多くの分野でスウェーデンの近代化を担った人材を送り出した。研究面でもカール・フォン・リンネを始め、世界の学術をリードする研究者が次々と育った。

現在のスウェーデンで2番目に古いのはルンド大学である。ルンドのあるスコネ地方はもともとデンマーク領であったが、1658年にスウェーデンに割譲された。時の国王カール10世はスコネをスウェーデン化する拠点として1666年にルンド大学を設立した。最初は国王の名前をとってRegia Academia Carolina(カール王立アカデミー)と呼ばれた。この大学はスウェーデンバルト帝国の隆盛を象徴するものであり、今やウプサラ大学とともに総合大学の双璧をなしている。

やがてロシア、プロイセンの台頭の前にスウェーデンバルト帝国は崩壊していく。悲劇はグスタフ4世アドルフの時代に訪れる。ナポレオンと一時的な同盟を結んだロシアはフィンランドに侵入し、スウェーデン軍を撃破した。1809年の講和でスウェーデンは500年以上にわたって支配してきた全フィンランドとオーランド諸島をロシアに献上させられた。フィンランドでの戦いは悲慘を極め、3人に一人の負傷兵が野戦病院で死んでいったという。この時期に即位したカール13世は負傷兵を直ちに治療して再び戦場に送り返せる有能な軍医を育てる必要を感じて1810年にカロリンスカ医科大学(Karolinska Institutet, KI)を創設した。皮肉なことにスウェーデン王国は1814年を最後に戦争に加わらない政策に舵を切ったため、この目的が達成されることはなかった。その意味でカロリンスカ医科大学はスウェーデン王国の没落と再生への変化を象徴する。



古風な3階建には1970年代初期に医学ノーベル委員会事務総長のオフィスがあった。後景の超近代的建物はノーベル賞受賞講演が行われるアウラメディカである。

負傷兵の治療には外科が重要であったため、最初はMedico Chirugiska Institutet(医科・外科大学)と呼ばれた。ルンド大学がAcademiaと呼ばれたのに比べると、Institutetは特定分野の教育機関であることを示す。1816年にカール13世に因んでCarolinska Institutetと命名された。しかし、この名前はほとんど通用せず、一般にはKongliga Carolinska Medico Chirugiska Institutet



KIの雛アカゲラ

(王立カロリンスカ医科・外科大学)が1968年まで使われた。この年の大学紛争で学生の意見に基づき現在のKarolinska Institutetに改められた。現在は公式英語名にもこれを使っている。この名前は簡潔で良いが大学の性格を直接的に表していないのが難点で、KIのホームページでは“A Medical University”とセットで使われている。言語体系の異なる和文では“カロリンスカ医科大学”と呼ぶのが最も自然であろう。

カロリンスカ医科大学はスウェーデンの対外政策転換と初期の教授達の卓見により、軍医学校から総合医科大学に目標を転換し、急速な発展を遂げてきた。国王の名前を冠する唯一の大学であったことも幸いしたかもしれない。1874年にはウプサラ大学にのみ帰属していた学位授与権がカロリンスカ医科大学にも認められ、翌年には医学博士第1号を出している。この大学の発展に決定的な貢献をしたのは1895年にAlfred Nobelがノーベル生理学・医学賞の選考と授与を同大学に委託したことである。これによりノーベル賞の権威が上がるとともにカロリンスカの名前は広く世界に知れわたり、世界中から生理学・医学に関する最先端の研究情報が集まってくるようになった。現在ノーベル賞の選考は50人の各分野の教授からなるNobel Assemblyとその上に立つMedical Nobel Committeeが行っている。これを維持するためにはかなりの数の優秀な人材を確保しなければならない。その努力により優れた人材が集まり、研究のレベルが上がっていった。当然研究費獲得での競争力も上がる。今やスウェーデン国内の医学研究の40%がカロリンスカ医科大学で行われており、他の6医学部を圧倒している。医学、および医学関連分野の人材教育にも精力的に取り組んでいる。現代の複雑化した社会では医学・医療問題の解決にはさまざまな分野の協力が必要になっており、単科大学であるカロリンスカ医科大学が今後どのようにこの複雑化に対応していくのが注目される。(本稿の情報は主に各大学のウェブサイトによった。瑞語和訳、Ms. Marika Tashima)

Issues of Recognition in Pragmatism and American Transcendentalismの開催

2015年12月16日～18日にかけて、JSPSストックホルム研究連絡センター、京都大学、ヘルシンキ大学、Academy of Finlandの共催で、ヘルシンキ大学において「承認の諸問題とプラグマティズム・アメリカ超越主義」をテーマにシンポジウムを開催した。

Risto Saarinenヘルシンキ大学教授、Sami Pihlströmヘルシンキ大学教授、森純一京都大学国際推進機構長の挨拶によりシンポジウムが開始され、川窪副センター長によるJSPS事業紹介が行われた。続いて、森機構長およびJeremy Rappleye京都大学特任准教授によるSPIRIT project “Philosophy as Translation and Understanding Other Cultures”の説明があった。

ギブソン松井佳子神田外語大学教授、嘉指信雄神戸大学教授、Jeremy Rappleye京都大学特任准教授、西郷南海子京都大学博士学生、藤本奈美京都大学博士学生、浅井健介京都大学博士学生、朱燁京都大学博士学生、曾我部和馬京都大学修士学生が講演を行った他、ヘルシンキ大学、Helsinki Collegium for Advanced Studies、タンペレ大学、ライプツィヒ大学、University College London、University College Dublinからの9名の講演者が講演を行った。

聴衆は熱心に聞き入り、講演後には活発な質疑応答が行われた。

(p.8に森機構長によるレポートを掲載)



森機構長による講演



ギブソン松井教授による講演



嘉指教授による講演



シンポジウム参加者集合写真

第4回Sweden-Japan Academic Networkの開催

2016年1月14日、スウェーデン王立科学アカデミー(KVA)において、JSPSストックホルム研究連絡センター、在スウェーデン日本国大使館、KVAの共催により、Sweden - Japan Academic Networkが開催された。

同会合は、スウェーデンの日本人研究者、JSPS事業経験者、日本に関心のあるスウェーデンの研究者、国費留学生等「日本」関連研究者間のネットワークの創設・強化および日瑞間の交流促進を目的として2012年度より開催しており、第4回目となる今回は約90名の参加者が集まった。

Dan Larhammar KVA 3rd Vice President、岩佐敬昭日本学術振興会理事による開会挨拶に続き、仁科浩二郎名古屋大学名誉教授およびKarl Grandin KVA科学史センター長/教授により日瑞研究交流の歴史に関する基調講演が行われた。これはJSPSスウェーデン同窓会10周年記念を踏まえたものである。仁科名誉教授は“Collaboration of Drs. Yoshio Nishina and Oskar Klein and its impact on Japanese physics”との演題で、仁科芳雄博士が量子力学創設期にコペンハーゲンのNiels Bohr研究所でスウェーデンの物理学者Klein博士と行った世界的に著名な共同研究の様子と仁科博士が帰国後日本の物理学を近代化し、湯川・朝永博士等のノーベル賞受賞者を育てるに至った経過を述べた。Grandin教授は“Swedish-Japanese scientific exchange: from Thunberg to today”の演題で、江戸時代に日本を訪れて初の日本植物誌を刊行したThunberg博士に始まる両国研究者の交流の歴史をノーベル賞関連史料も含めて概観した。

基調講演後は、山崎純スウェーデン駐箚特命全権大使の挨拶によりレセプションが始まり、参加者間の意見交換が活発に行われた。



仁科名誉教授による基調講演

スウェーデン同窓会総会、10周年記念シンポジウムの開催

2016年1月14日～15日にかけて、スウェーデン同窓会総会およびJSPSスウェーデン同窓会10周年記念シンポジウムを開催した。

1月14日、スウェーデン王立科学アカデミー(KVA)において総会が開催され、10周年という節目の年を迎えた同窓会の今後の活動について議論が行われた。また、次期役員が選出され、会長には現役員のGöran Thorスウェーデン農業大学教授が就任することとなった。

翌日の1月15日、スウェーデン王立工科大学(KTH)において、JSPSストックホルム研究連絡センター、JSPSスウェーデン同窓会の共催により、JSPSスウェーデン同窓会10周年記念シンポジウムが開催された。同シンポジウムは“The exchange history of Swedish and Japanese researchers and its future”をテーマとして行われ、約40名の参加者が集まった。

岩佐敬昭日本学術振興会理事が開会の挨拶を述べ、Thor教授がスピーチを行い、シンポジウムが開始された。

仁科浩二郎名古屋大学名誉教授が“Yoshio Nishina and the birth of modern physics in Japan”、Stefan Ekmanウプサラ大学進化博物館シニアキュレーターが“Carl Peter Thunberg, Swedish botanist in Japan, now online”と題した基調講演を行った他、JSPSスウェーデン同窓会幹部のImre Pazsitシャルマーシュ工科大学名誉教授、Elin Palmリンシェーピング大学助教、Janne Wallenius KTH教授、中西友子東京大学教授、Catharina Blombergストックホルム大学博士研究員、Mohammad Asadzadehシャルマーシュ工科大学教授、Lars Bohlinウプサラ大学名誉教授、Lars Öhrströmシャルマーシュ工科大学教授、Carl-Henrik Heldin Ludwig Institute for Cancer Research教授兼ノーベル財団理事長が講演を行った。



岩佐理事による開会の挨拶

プログラムにはグループディスカッションが含まれ、全参加者が4つのグループに分かれてJSPSスウェーデン同窓会の将来をテーマに意見交換を行った。

シンポジウム終了後にはレセプションが開催され、活発な意見交換が行われた。

(英語版Newsletter Vol. 23 p.11～12にPazsit名誉教授によるレポートを掲載)

スウェーデン同窓会セミナーの開催

2016年1月20日～21日にかけて、リンシェーピング大学において“Epigenetics in Disease and Well-Being”をテーマにJSPSスウェーデン同窓会セミナーが開催された。2日間で計11名が講演を行った。

20日は、セミナーオーガナイザーのHeriberto Rodriguez-Martinezリンシェーピング大学教授による挨拶に始まり、阿久津センター長によるJSPS事業紹介が行われた。続いてリンシェーピング大学の研究者4名の講演、久保田健夫山梨大学教授による“Epigenetic Alterations Induced by Environmental Stress Associated with Metabolic and Neurodevelopmental Disorders”と題した講演が行われた。

講演終了後にはディスカッションの時間が設けられ、活発な意見交換が行われていた。

(p.9に久保田教授によるレポートを掲載)



久保田教授による講演

在スウェーデン日本国大使館新年会への参加

2016年1月21日、スウェーデン駐箚特命全権大使公邸において新年会が開催され、スウェーデン各地の日本人会やスウェーデン駐在日本企業の代表者、日本と深いつながりを持つスウェーデン人等が参加した。

冒頭には、山崎純スウェーデン駐箚特命全権大使より、本年が「物事が大きく変化する」年だといわれる丙申の年に当たること、60年前の丙申の年には日本がスウェーデン出身のダグ・ハマーショルド氏が事務総長を務める国際連合に加盟した年であることについて話があり、日本とスウェーデンの二国間関係が今年も大きく発展することを願う挨拶があった。

また、鏡割りや餅つき等の催しとともに和食や日本酒がふるまわれ、和やかな雰囲気の中、参加者同士の懇親が深められた。

在スウェーデン日本国大使館

http://www.se.emb-japan.go.jp/nihongo/activity_160121.html



阿久津センター長による餅つきの様子

2015年度第3回KVA-JSPSセミナーの開催



ヨーテボリ大学での門脇教授による講演

当センターは2009年度からスウェーデン王立科学アカデミー(KVA)との共催で、当地で関心が高い研究業績を有する日本の研究者の講演会を企画・開催している。

2015年度第3回目となる今回は、門脇孝東京大学大学院医学系研究科教授を招聘し、2016年2月1日、2日、3日にカロリンスカ医科大学(Karolinska Institutet) (ストックホルム市)、ルンド大学(マルメ市)、ヨーテボリ大学(ヨーテボリ市)において同セミナーを開催した。

門脇教授は、カロリンスカ医科大学で“Molecular mechanism of insulin resistance and type 2 diabetes”、ルンド大学で“Genetic and environmental factors in the pathogenesis of type 2 diabetes”、ヨーテボリ大学で“Brown and white adipose tissues in obesity and type 2 diabetes”と題した講演を行った。セミナー期間中200名以上の学生や研究者が出席し、講演後には活発な質疑応答が行われていた。

各会場では、阿久津センター長がゼミナー参加者にJSPS事業紹介を行った。

(門脇教授によるレポートは次号掲載予定)

Japan Alumni Forum 2016

2016年2月9日、JSPSストックホルム研究連絡センター、在フィンランド日本国大使館の共催で、6か月以上の日本滞在経験があるフィンランド人を対象としたイベントを開催した。イベントには127名の参加者が集まった。

三輪芳明在フィンランド日本国大使館一等書記官、阿久津センター長の挨拶により本会合が開始された。

続いてAnna-Maria von Bonsdorff Ateneum Museum Chief Curator兼Japanomania Exhibition Project Managerによる“Japanomania in the Nordic Countries 1875-1918”と題した講演、Tuija Seppänen Japan House Project Coordinatorによる“Japan House in Ranua: Cultural Co-operation at the Grassroots Level”と題した講演、Petri Vuori Finnair Plc. Network Planning Vice-Presidentによる“Finnair Growth in Japan: New Route to Fukuoka”と題した講演が行われた。

講演終了後には参加者間の交流の時間が設けられ、日本滞在中の経験等について情報交換が行われた。



阿久津センター長による挨拶

デンマーク同窓会幹部会、設立総会、Japan Alumni and Researcher Assembly 2016

2016年2月12日、デンマーク工科大学において、デンマーク同窓会幹部会、設立総会、Japan Alumni and Researcher Assembly 2016が開催された。

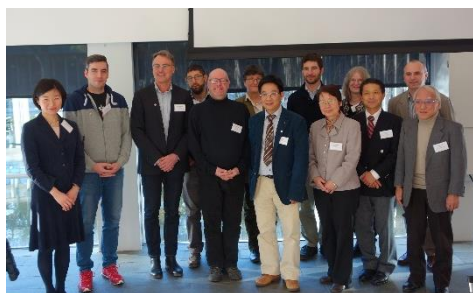
幹部会では、Sam K. Steffensen JSPSデンマーク同窓会会長による開会挨拶、参加者自己紹介の後、樋口和憲 JSPS人物交流課長から“Independent Activities of JSPS Alumni Association”と題して、先行して設立されている他国のJSPS 同窓会活動の事例を紹介しつつ、同窓会の自主的な運営を促す説明、Steffensen会長から活動方針、活動スケジュールの説明があった。

続いてSteffensen 会長、西川恵子日本学術振興会監事の挨拶により設立総会が開始され、会則の承認、役員の選出が行われ、更に今後の学術イベントのテーマや開催場所、研究者交流に関して出席した会員間で意見交換が行われた。その後、西川監事から会員へ同窓会バッジが贈呈された。

設立総会の後には同会場において、JSPSストックホルム研究連絡センター、JSPSデンマーク同窓会、在デンマーク日本国大使館、東海大学同窓会デンマーク支部会の共催により、Japan Alumni and Researcher Assembly 2016が開催され、70名を超える参加者が集まった。

篠田欣二在デンマーク日本国大使館参事官、西川監事の挨拶に続き、福田健二帯広畜産大学准教授が「デンマークに滞在して研究をした理由」、Birte Svenssonデンマーク工科大学教授が「30年間のデンマークと日本との研究交流」、阿川淳之日本航空株式会社ヘルシンキ支店総務セクションマネージャーが「日本の紹介」をテーマとした講演を行った。講演後には、在デンマーク日本国大使館、東海大学同窓会デンマーク支部会、阿久津センター長からそれぞれ国費留学生制度、東海大学ヨーロッパ学術センターの事業、JSPS国際交流事業についての説明があった。

プログラム終了後にはレセプションが開催され、参加者間の意見交換が活発に行われた。
(福田准教授によるレポートは次号掲載予定)



設立総会における同窓会会員、西川監事、JSPS職員
による集合写真



福田准教授による講演

IVAセミナー: "The future forest industry – What could Sweden learn from Japan?"

京都大学生存圏研究所 教授 矢野浩之

スウェーデンと日本は、ともに国土の約2/3が森林に覆われた、世界有数の森林国である。持続的に管理された森林から生み出される木材、紙・パルプに関する産業は、両国において重要な産業となっている。とりわけスウェーデンでは、輸出額の3割をTimberやPulp&paperなどのForest products: 林産物が占め、カナダや米国と同様に、多くの雇用を生み出している。一方で、紙離れは、世界的に進んでおり、それによる製紙の生産、価格競争も年々厳しくなっている。日本やスウェーデンの製紙産業には、新たなプロダクトを生み出すことへの挑戦が求められている。

その様な中、セルロースナノファイバー (CNF) という新しい素材に注目が集まっている。セルロースナノファイバーは、すべての植物細胞の主要骨格物質で、毎日、太陽の光により、水と二酸化炭素から持続的に生産される幅4-20nmのナノ繊維である。鋼鉄の1/5の軽さで、その5倍以上の強度を有する。また、線熱膨張係数がガラスの1/50以下と極めて小さい。次世代の大型産業資材あるいはグリーンナノ材料としてセルロースナノファイバーの製造と利用に関する研究が、今、世界中で活発化している。日本およびスウェーデンは、この新素材にいち早く注目し、世界をリードして研究を進めている。

今回、そのような両国が、ナノセルロースなどの新しい木質バイオマス素材をベースとしたこれからの産業のあり方について議論をする、IVAセミナー: "The future forest industry – What could Sweden learn from Japan?" が、スウェーデン王立工学アカデミー (IVA)、在スウェーデン日本国大使館、瑞日基金、JSPSストックホルム研究連絡センターの共催により、スウェーデン王立工科大学のMikael Lindström 教授をモデレーターとして、2015年11月3日夜、ストックホルムにあるIVA本部において開催された。

まず、日本側から、筆者と経済産業省紙業服飾課長、渡邊政嘉氏が講演を行った。筆者は、"The future direction of bio-based materials inspired by nano- to micro-structures in plants"と題して、セルロースナノファイバーの構造や特性について概説した後、2001年より京都大学生存圏研究所 (旧木質科学研究所) において開発してきた、鋼鉄の1/5の軽さで、鋼鉄並みの強度を有するCNF材料や透明でフレキシブルな低熱膨張CNF材料について紹介した。また、ナノ材料としての木材の優れた構造について触れながら、植物資源を用いた材料は、そのナノレベルからマイクロレベルに至る構造を上手く制御できれば、省エネルギー的に高性能材料へと変換できる可能性があることを述べた。

続いて、渡邊課長は、Strategy to create advanced biomass industryと題して、日本の製紙産業が置かれている状況について説明をした後、現状を打破し、製紙産業を高度バイオマス産業とするための戦略について紹介した。その中で、セルロースナノファイバー材料の重要性を明確にした後、我が国では、経産省の主導でナノセルロースフォーラムが2014年6月に発足したこと、「日本再興戦略」改訂2014においてCNFのマテリアル利用の促進に向けた取り組みを推進することが明記されたこと、それを受けて、農林水産省、経済産業省、環境省、文部科学省、国土交通省が連携してナノセルロースに関する政策連携のためのガバニングボードとして「ナノセルロース推進関係省庁連絡会議」が創設されたことなど、セルロースナノファイバー材料の社会実装を促進する体制が急速に日本において構築されつつあることを紹介した。また、最近進んでいるナノセルロースの国際標準化について、スウェーデンと日本が協力して取り組むことの重要性を訴えた。

講演終了後、Elisabeth Backteman 氏 (スウェーデン産業省State Secretary)、Lars Berglund教授 (スウェーデン王立工科大学)、Tom Lindström教授 (Innventia) が加わり、スウェーデンにおけるセルロースナノファイバー材料開発の現状と今後の方向性、国としてのCNF材料への期待などについて、参加者とともに意見交換がなされた。再生可能な資源に基づく持続型社会の構築は、21世紀の重要な課題である。CO₂を吸収固定し、持続的に生産される木材やパルプの先進的利用に関する研究開発を、森林国であるスウェーデン、日本が協力して、地球環境に配慮しつつ世界をリードして強力に推進すべきことが確認された、非常に有意義な夜であった。

最後に今回のセミナーに出席するにあたり、大変お世話になったJSPSストックホルム研究連絡センターの皆様にも深く感謝致します。



矢野教授による講演

流動ダイナミクスとスピントロニクスに関する国際ワークショップの開催

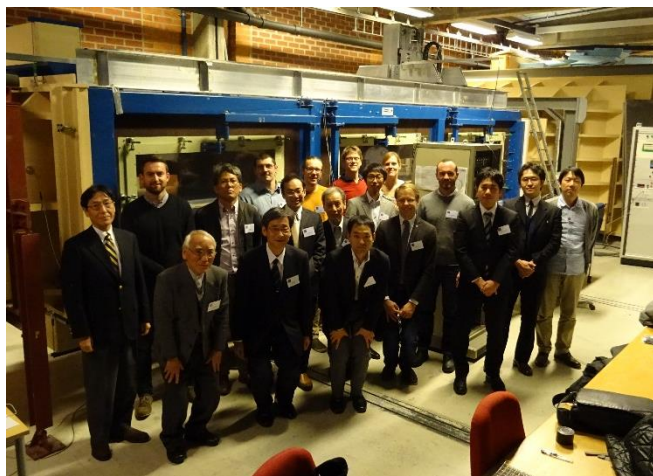
東北大学流体科学研究所 教授 早瀬敏幸

東北大学は研究・教育の国際化推進のため、スウェーデン王立工科大学（KTH）にリエゾンオフィスを設置しており、国際共同研究や学生交流が活発に行われています。このたび、JSPSストックホルムセンターの支援を受け、流体科学分野・スピントロニクス分野の両分野の融合による新しい研究展開および両大学の共同研究の促進を目的として平成27年11月12日、13日に流動ダイナミクスとスピントロニクスに関する国際ワークショップ（International Workshop on Flow Dynamics and Spintronics）をKTHにおいて開催しました。東北大学とKTHのジョイントワークショップは2013年、2014年に開催されたワークショップに引き続き、今年で3度目の開催となります。本ワークショップでは、東北大学とKTHの教員や学生の他に、Uppsala UniversityのVassilios Kapaklis准教授、University of GothenburgのRandy Duman博士が参加し、計22件の講演が行われました。1日目には流体科学に関する講演が、2日目にはスピントロニクスに関する講演と、東北大学とKTHの共同研究に関する講演が行われ、各大学・研究機関における最先端の研究成果の発表および議論が活発に行われました。

本ワークショップでは流体科学とスピントロニクスに関する基調講演がそれぞれ2件ずつ行われました。東北大学流体科学研究所 大林茂 所長は、デザイン設計のための多目的最適化手法に関する講演を行いました。プレート最適解やデータマイニングのデザイン設計への活用について説明し、その応用例として産学連携を行っている国産リージョナルジェットの結果が示されました。KTH Ardeshtir Hanifi教授は境界層遷移に関する講演を行いました。表面粗さや流入流速の変動が境界層遷移に与える影響が示され、このような遷移の影響を遅らせることが航空機の流体抵抗低減に関して重要であることが説明されました。東北大学流体科学研究所 寒川誠二 教授はナノスケールの加工を可能とする中性粒子ビーム技術の開発について講演を行いました。このような技術は高精度なエッチングなどの表面加工を可能とし、将来的なナノスケールデバイスの製造に対して極めて有効な技術であることが示されました。University of Gothenburg Randy Duman博士はナノコンタクト型スピントルク発信素子の同期現象について講演しました。複数の素子の配置による同期現象の挙動など、最新の研究成果が示されました。

16件の招待講演では、流体科学分野においては乱流に関する基礎的研究に加え、計測とシミュレーションの融合解析、医療応用のための血流解析、高機能材料創生のための流動解析に関する研究、スピントロニクス分野においては熱や流体との連成問題に関する研究などバラエティに富んだ内容の研究発表と活発な議論が行われました。また、東北大学とKTHの共同研究の進捗状況の報告が行われ、活発な議論が交わされました。これらの議論によって共同研究の新たな方向性の議論が始まるなど、非常に有意義な交流となりました。

本ワークショップは流体科学分野とスピントロニクス分野を融合した新しい基礎研究への展開や東北大学とKTHの研究協力の促進に繋がるものとなりました。ここに、JSPSをはじめ、関係各位に厚く御礼申し上げます。



ワークショップ参加者集合写真

ヘルシンキ大学での国際会議報告

京都大学国際交流推進機構 教授 森純一

京都大学融合チーム研究プログラム (SPIRITS)
「『翻訳としての哲学』と他文化理解：双方向的国際化
に向けた哲学と教育の学際研究」は、2015年12月16日
より18日までヘルシンキ大学において、国際会議

「Issues of recognition in pragmatism and American
transcendentalism (承認の諸問題とプラグマティズム・
アメリカ超越主義)」を開催した。この会議は、北欧諸
国と日本の研究者の学術交流を主眼として日本学術振興
会ストックホルム研究連絡センター、京都大学、ヘルシ
ンキ大学COE「理性と宗教的承認」プロジェクト・フィン
ランドアカデミー、ヘルシンキ高等研究コレギウムと
の共催で開催できたものである。本SPIRITプロジェクト
は京都大学大学院教育学研究科の齋藤直子が研究代表者
として2014年からこれまでも京都、ヘルシンキ、ロンド
ン、パリなどで国際会議を開催してきた。(報告者はそ
のメンバーであるが、哲学者ではない。その限りでの報
告としてお読みいただきたい。)

グローバル化が進む中で、異文化間の相違を如
何に乗り越えるかが課題となっている。本会議の目的は、
非英語圏の国であるフィンランドと日本がその地理的ま
た文化的な特性を活かし、異文化間共生の問題に対して、
主流的な英米思想に対峙して新たな展開を求めることに
ある。そして米国のプラグマティズムと超絶主義を契機
として、教育学、宗教学、政治学、美学、文学などの諸
分野において、承認 (recognition) を人間の本性と言語
の両面から再検証をすることであった。recognitionとい
う言葉は日本語の「承認」とはかなり異なる意味を持ち、
第三者の存在を認めるという「受容」に近い意味がある
ように感じられた。

幾つかの講演を紹介する。Paul Standish(UCL教育研
究所)はRecognitionとAcknowledgmentの相違を論じた上
で、奴隷制や人種差別、ナチスの問題に展開され、知識
の限界を指摘した。



森教授による講演

宗教についての議論では、欧州の神学の議論も興味
深い。ヘルシンキ大学のSari KivistöとSami Pihlström
は神学プロジェクトの紹介を行った。全能の神がなぜ
人間に苦痛を与えるのかという問題は西洋神学の長い
課題である。Beate Bengard (ライプツィヒ大学) の
発表は、キリスト教のなかにおける宗派間の対立を乗
り越えるための試みを取り扱ったもので、キリスト教
の枠を超えた宗教間の対話のモデルとなりうる可能性
を感じさせた。

教育における文学や哲学の意義についても興味あ
ふれる研究発表が行われた。Áine Mahon (ユニバーシ
ティ・カレッジ・ダブリン)はリベラルアーツ教育のな
かで文学の果たしうる役割を述べている。文化の壁を
越え人間に対する共感を養うものは文学である。また
Risto Saarinen (ヘルシンキ大学)は新しいテクノロジー
のなかで生きる現代人の問題点をスカンジナビアの二
つの文学作品によりながら鋭く描き出した。嘉指信雄
(神戸大学)はエマーソンが近代日本の思想や文学に
与えた影響を分析し、特に平塚雷鳥にスポットを与え
て、その影響を述べている。ギブソン松井佳子 (神田
外語大学)は檜山節孝など複数の文学作品の分析を通
じて人間尊厳の問題を論じている。

最終日には、京都大学で哲学や教育哲学を学ぶ若手
研究者や学生たちによる発表も行われた。彼らが研究
する哲学から承認という言葉に迫る興味あふれる発表
であったが、海外研究者から率直かつ真摯なコメント
があったことを述べておきたい。

この会議を通じ、「承認」という哲学的な問題は実
は現在の時事的な問題そのものであると感じられた。
これまで難民や移民の受け入れについて寛容であった
欧米諸国でも否定的な意見が聞かれるようになっては
いるが、多くの難民移民を受け入れてきたことは事実
であり、その素地に承認を巡る哲学的な考えがあるの
であろう。

今回の会合は、教育、特に高等教育におけるリベラ
ルアーツの果たす役割についても貴重な議論を提供し
た。哲学や文学は、将来の研究者や実務家に一生を通
じて彼らを支える豊穡な基礎を与える。我が国におけ
る大学改革議論に必要な視点である。

このような貴重な機会を可能として頂いたJSPSス
tockホルム研究連絡センターに改めて御礼を申し上げ
たい。

* 文中敬称略

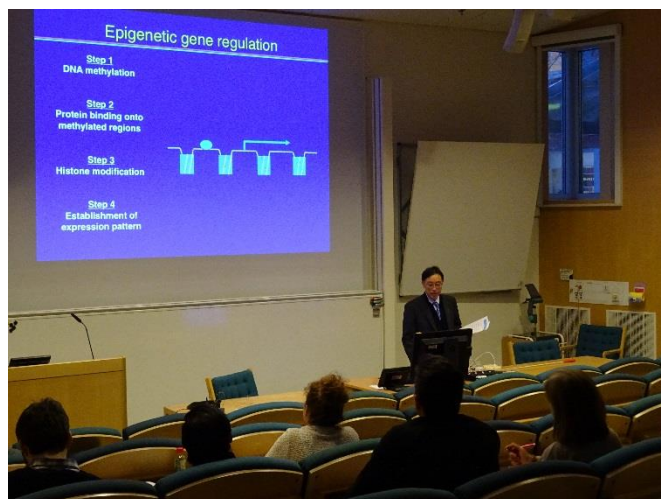
JSPS-Linköping大学共催セミナー

山梨大学 教授 久保田健夫

2016年1月20～21日の2日間ストックホルム郊外のLinköping大学で開催されたセミナーに日本学術振興会（JSPS）のご支援によりご招待いただいた。タイトルは「疾患と健康に関するエピジェネティクス：次世代への脆弱体質の遺伝、この現象はエピジェネティクスで全て説明できるのか？」であった。生物学の教典であるダーウィン進化論では「環境で獲得された形質は次世代に遺伝しない」とされてきたが、近年のエピジェネティクス研究がこれに反駁する証拠を示し始めた。今回のセミナーはこの流れを受けてのものであった。

セミナー初日の朝早く、主催者であるHeriberto Rodriguez-Martinez教授を訪問した。伝統ある病院と研究施設をご案内いただいた後、シャトルバスで新キャンパスに移動し、基礎研究棟のセミナー会場にお連れいただいた。セミナーの冒頭、JSPSストックホルム研究連絡センター所長の阿久津秀雄先生からJSPSの研究支援プログラムのご紹介があった。これに続いて、Rodriguez先生の司会でLinköping大学の先生方によるエピジェネティクス研究の発表がなされた。さまざまな対象（ヒト、マウス、ショウジョウバエ、トリ）に基づく獲得形質のエピジェネティック遺伝を示唆する最近の成果が提示された。この日の最後に「代謝疾患・精神疾患に関わる環境誘導性エピジェネティクス変化」と題して自身の講演をさせていただいた。

セミナー2日目は生殖補助医療や精神ストレスといった臨床的なエピジェネティクス研究が紹介された。セミナーの閉会時、突然、アメリカから戻ったばかりの新進気鋭の教授がマイクの前に立ち、「本セミナーで学内で素晴らしいエピジェネティクス研究が展開されていることがわかった。また研究者が一堂に会する初めての機会であった。これをきっかけに今後もセミナーを定期的で開催し、メーリングリストで情報を交換しさらに盛り上げていきたいと思うが、ご賛同いただけるか」と提案を行った。この提案はその場で満場一致で受け入れられた。また来場者アンケートから今回の企画は好評であり、学生たちから「エピジェネティクスを初めて知りその面白さを知った。これを自身の研究に活かしていきたい」との声が多数聞かれた。



久保田教授による講演

実はセミナーの前、日本を発つとき成田空港でフライトの出発に遅れが生じ、途中の中継地での予定の便への乗り換えが危うくなった。しかし、ヘルシンキ空港、ストックホルム空港に着くたびにRodriguez先生から携帯電話に連絡が入り、適切な誘導のおかげでフライトや列車に乗り遅れることなく無事にLinköping駅に到着することができた。駅にはRodriguez先生のポストクが迎えに来てくれていた。

帰国後、そのポストクからJSPSの支援制度を利用して日本に留学をしたい旨のメールがきた。幸いにもすぐに受け入れ可能な研究室が見つかった。これにより、彼を受け入れた日本の研究室の国際化、彼が帰国後はこの研究室の実験技法がLinköping大学さらにはヨーロッパの各研究室に広がっていくものと思われた。

末筆ながら、Linköping大学のエピジェネティクス研究のキックオフミーティングに海外からの研究者としてお招きいただいたRodriguez先生、貴重なご教示をいただいたLinköping大学の先生方、渡航に際し多大なご支援いただいた阿久津先生やTashima様をはじめとするJSPSストックホルム研究連絡センターの方々に、この場をお借りして深く御礼申し上げます。

その他打合せ・来会等

山崎純 スウェーデン駐箚特命全権大使表敬訪問(12月10日)

安西祐一郎日本学術振興会理事長、安藤博同国際企画課長、笹川綾香同研究協力第一課長が山崎純スウェーデン駐箚特命全権大使を表敬訪問し、今後の日瑞学術交流の促進について意見交換を行った。当センターより、川窪副センター長が同行した。



日本学術振興会 安西祐一郎理事長、安藤博国際企画課長、笹川綾香研究協力第一課長の来会(12月11日)



安西祐一郎日本学術振興会理事長、安藤博同国際企画課長、笹川綾香同研究協力第一課長が当センターを訪問し、今後の日瑞学術交流の促進について意見交換を行った。当方からは北欧およびバルト三国における学術交流状況やセンターの活動内容を説明した。

北海道大学ヘルシンキオフィス訪問(12月16日)

ヘルシンキ大学を訪問し、サロマ・テロ北海道大学ヘルシンキオフィス副所長とミーティングを行った。サロマ副所長より、リトアニアおよびラトビア訪問をし、大学・研究評議会と面会したとの報告があり、大学の連絡担当者等の情報提供があった。また、来年度のセミナー企画について意見交換を行った。

竹内麻梨子 在ノルウェー日本国大使館三等書記官の来会(12月18日)

会議出席のために来瑞中の竹内麻梨子在ノルウェー日本国大使館三等書記官が当センターを訪問した。ノルウェーにおける日本人研究者および現地研究者との交流について意見交換を行った。

藤井祥万 早稲田大学学生の来会(1月7日)

留学予定大学訪問のため来瑞中の早稲田大学学生藤井祥万氏が当センターを訪問した。留学計画について説明があり、当方からはセンターの活動内容や日本人研究者ネットワークについて情報提供を行った。

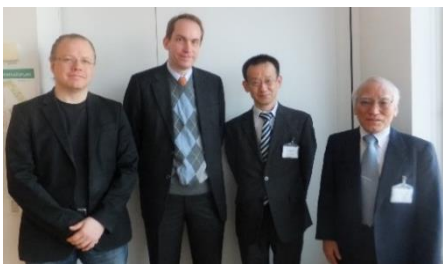


大阪大学およびウプサラ大学からの来会(1月13日)

中川敦史大阪大学蛋白質研究所教授、山下栄樹同助教、東浦彰史同特任助教、中道優介同特任研究員、岡本健太ウプサラ大学BMC研究員が当センターを訪問し、来年度開催予定のシンポジウムについて打ち合わせを行った。また、当方からセンターの活動について説明を行った。



STINT訪問訪問(1月14日)



岩佐敬昭日本学術振興会理事、北島江里子同国際協力員がSTINTを訪問し、Andreas Göthenbergエグゼクティブディレクター、Mattias Löwhagenプログラマネージャーとミーティングを行った。二国間交流事業（共同研究）やサマープログラムについて意見交換を行った他、両国の高等教育制度について情報交換を行った。当センターより、阿久津センター長が同行した。

ノーベル博物館訪問訪問(1月15日)

岩佐敬昭日本学術振興会理事、中兼優介同国際協力員がノーベル博物館を訪問し、Olov Amelin館長、Katarina Nordqvistシニアキュレーター、Eva Windrupシニアキュレーターとミーティングを行い、日瑞の科学技術研究環境を取り巻く状況について意見交換を行った。当センターより、阿久津センター長が同行した。



ルンド大学およびウプサラ大学からの来会(1月25日)



Olov Sternerルンド大学理学部長、Sonia Coelho Sutton 同SACFプロジェクトリーダー、Henrik Hofvendahl 同アジア担当マネージャー、Leif Kirsebomウプサラ大学副学長顧問（国際化担当）が当センターを訪問した。日瑞学長会議を受け、ルンド大学を中心として形成されたスウェーデン側大学のコンソーシアムを代表しての訪問である。今後の日本とスウェーデンの大学間交流強化を目的とした取組みについて意見交換を行った。

スウェーデン王立工科大学(KTH)訪問(1月26日)

スウェーデン王立工科大学（KTH）を訪問し、Gustav Amberg KTH教育能力開発・男女共同参画担当副学長、Torkel Werge同国際関係アドバイザー、Maria G Masuccisカロリンスカ医科大学国際担当副学長、Dobril-Philip Petkov同国際コーディネーター、Anders Karlhedeストックホルム大学科学分野担当副学長、Elisabet Idermark同国際関係シニアアドバイザーとミーティングを行った。日瑞学長会議を経て検討されている、KTH、カロリンスカ医科大学、ストックホルム大学、東京大学によるシンポジウムおよびサマースクールに関する意見交換、日本の大学との交流状況に関する情報共有を行った。また、当方からセンターの活動等について説明を行った。

門脇孝 東京大学教授の来会(2月1日)

2月1日～3日のKVA-JSPSセミナーで講演予定の門脇孝東京大学教授が当センターを訪問した。門脇教授よりKVA-JSPSセミナーに関する質問があり、当方から同セミナーについて説明するとともに、センターの活動全般について情報提供を行った。



日本学術振興会 西川恵子監事、樋口和憲人物交流課長、佐藤寿外国人特別研究員係長の来会(2月11日)



2月12日のデンマーク同窓会幹部会、設立総会、Japan Alumni and Researcher Assembly 2016に合わせて来瑞中の西川恵子日本学術振興会監事、樋口和憲同人物交流課長、佐藤寿同外国人特別研究員係長が当センターを訪問した。日瑞の学术交流の現状、当センターの活動内容について情報共有を行った他、来年度の予算について意見交換を行った。

ノルウェーリサーチカウンシル(RCN)訪問(2月18日)

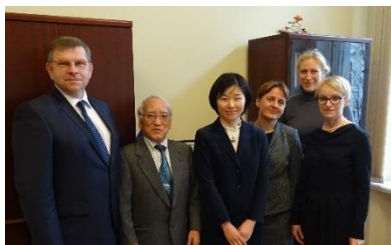
ノルウェーリサーチカウンシル(RCN)を訪問し、Bjørn Tore Kjellemo研究協力開発部門長、Julie Christiansenシニアアドバイザー、Merethe Moe職員とミーティングを行った。RCNが今後行う予定のイベントや事業について詳細を聴取し、今後の協力について具体的に協議した。また、JSPSのフェローシッププログラムの申請状況を聴取し、同プログラムへの申請数を増やすための工夫について協議した。



スウェーデン国王カール16世グスタフ陛下およびRoyal Technology Mission 2016 主催夕食会(2月18日)

スウェーデン国王カール16世グスタフ陛下およびRoyal Technology Mission 2016 主催の夕食会が東京において開催され、当センターからは阿久津センター長が出席した。

リトアニア共和国訪問(2月22日)



リトアニア共和国のResearch Council of Lithuania、在リトアニア日本国大使館を訪問し、リトアニアと日本の学术交流の現状、課題について情報交換を行った。また、今後の協力の可能性について意見交換を行った。

Maria G Masuccis カロリンスカ医科大学(Karolinska Institutet)国際担当副学長訪問(2月24日)

Maria G Masuccisカロリンスカ医科大学(Karolinska Institutet)国際担当副学長およびDobril-Philip Petkov国際コーディネーターを訪問し、カロリンスカ医科大学、東京大学、当センターの共催で来年度開催予定のイベントについて意見交換を行った。

Bjorn E. Christensen ノルウェー科学技術大学(NTNU)教授 (環境とエネルギーにおける京都国際フォーラム(KIFEE)ノルウェー側責任者)の来会(2月24日)



Bjorn E. Christensen ノルウェー科学技術大学 (NTNU) 教授が当センターを訪問した。環境とエネルギーにおける京都国際フォーラム (KIFEE) に対するノルウェー側の支援が得られたので、日本側に対するJSPS等からの支援の可能性について質問があり、当方からJSPS国際交流事業および文部科学省の大学国際化のための事業について説明を行った。

田淵エルガ 横浜国立大学准教授の来会(2月26日)

スウェーデンおよびノルウェーにおける知的財産制度の調査のため来瑞中の田淵エルガ横浜国立大学准教授が当センターを訪問した。北欧・バルト諸国における当センターの活動および国際交流状況について意見交換を行った。



コラム～イースターの魔女～

スウェーデンではイースターが近づくと、顔をペイントして、箒を持ち、魔女の装いをした子供たちが、ハロウィンのようにお菓子を求めてドアをノックする場面に遭遇する。

これは、魔女がイースターの前の木曜日にBlåkullaという名の伝説の草原に飛んで行き、悪魔とダンスしたという古くからの言い伝えに由来すると言われている。

また、かつては魔女が帰ってこないよう、追い払う意味を込めて火を灯した。現在では、イースターの日曜日に至るまでの間に国中で行われる、大きなかがり火や花火がこれに相当する。



The Localホームページより転載

(参考)
The Local
<http://www.thelocal.se/20150401/six-super-swedish-family-easter-traditions>
Time
http://content.time.com/time/specials/packages/article/0,28804,1889922_1890008_1889927,00.html

スウェーデン:第6回日スウェーデン科学技術協力合同委員会開催

2016年2月12日、東京において、桂誠外務省科学技術協力担当大使及びヨナス・ビョルク・スウェーデン教育研究省研究政策局長の共同議長の下、1999年に発効した日スウェーデン科学技術協力協定に基づき設置された日スウェーデン科学技術協力合同委員会の第6回会合が開催された。

今回の合同委員会は、2月16日～20日のカール16世グスタフ国王陛下率いる国王科学技術代表団の訪日に先立ち行われ、両国の広範な府省庁、助成機関、研究機関、及び駐日スウェーデン大使館からハイレベルな代表者が参加した。

両国は双方の現況について紹介し、科学技術イノベーション政策の進捗状況、「生命科学(薬剤耐性中心)」、「高齢化社会」、「環境/農業・森林及び気候変動」、「極地研究」といった主要な分野別協力、「科学技術イノベーション協力の枠組み」、特定の議題である「パブリック・アカデミック・アウトリーチ」について意見交換を行った。

科学技術イノベーション政策の進捗状況に関する議論では、両国は持続可能な成長を実現するための基幹としての科学技術イノベーション政策の重要性を力説し、両国におけるイノベーションの実績に対する政府の高い意気込みを強調した。

「科学技術イノベーション協力の枠組み」のセッションでは、両国は、日本学術振興会(JSPS)とスウェーデン研究・高等教育国際協力財団(STINT)間のMOUに基づく研究者交流や国際共同研究事業の活用を継続していくことを推奨した。

「パブリック・アカデミック・アウトリーチ」の議題に際し、JSPS及びノーベル財団の共催で行われたノーベル・プライズ・ダイアログ東京に関するJSPSの発表、日スウェーデン学長サミットに関する駐日スウェーデン大使館の発表が行われ、両国はこれらを好意的に評価した。これらのイベントはいずれも2015年に開催されたものである。両国は、科学技術イノベーション分野における一般また学術界の関与を促進するため、類似のイベントを開催することを表明した。

合同委員会に引き続いて行われた関連機関間の分科会では、主要な協力分野のほぼ全てが、協力を一層強化するため個別にフォローアップされた。

両国の共同議長は、建設的な本合同委員会を通じた科学技術イノベーション分野における幅広い協力関係に留意すると共に、この分野の協力を増強するという両国の決意を確認し、継続的に専門的知見を共有することによる二国間のパートナーシップの拡大を通じてグローバル課題の解決に貢献するという期待を示した。

外務省

http://www.mofa.go.jp/mofaj/dns/isc/page4_001770.html

スウェーデン:高等教育と雇用

スウェーデンの高等教育を受けた人の就業率は、経済協力開発機構(OECD)の中で最も高い部類にあり、失業率は2009年以降減少している。男性の失業率よりも女性の失業率が低く、これはOECDの状況と逆である。しかし、高等教育を受けた女性のうち、フルタイムで雇用されているのは59%であり、これはOECDの平均と等しい。

スウェーデンの高等教育を受けた人の給与額はOECDの中で最も低い部類である。高等教育を受けた女性は、中等教育を受けた女性よりも平均で25%多く給与を得ているが、男性ではこの割合が29%となる。

Harriet Wallberg高等教育庁長官は、「高等教育が雇用に繋がるという点は大変喜ばしいことである。しかし、個人の給与については改善の余地がある。」と述べている。

スウェーデン高等教育庁<http://english.uka.se/news/2016-02-09-sweden-ranks-highest-in-the-oecd-higher-education-leads-to-employment.html>

スウェーデン:スウェーデン王立工学アカデミー(IVA)が中西友子東京大学教授を会員として選出

2015年9月2日、スウェーデン王立工学アカデミー(IVA)は、2015年外国人会員として、中西友子東京大学教授を選出した。日本人の会員としては16人目となる。

IVAは1919年の設立以来、延べ約300人の外国人会員を選出している。会員はスウェーデン国王から会員証が手渡され、毎年各種会合に関わることとなる。

東京大学

<http://www.a.u-tokyo.ac.jp/news/2015/20151111-1.html>

IVA

<http://www.iva.se/publicerat/danica-kragic-jensfelt-lars-strannegard-och-tre-ytterligare-invalda-i-iva/>



IVA会員証授与の様子

写真: Edvard Fleetwood瑞日基金事務局長

スウェーデン:スウェーデン国王カール16世グスタフ陛下、 スウェーデン王立工学アカデミー(IVA)の科学技術代表団と共に訪日

2016年2月16日～19日、スウェーデン国王カール16世グスタフ陛下がスウェーデン王立工学アカデミー(IVA)の科学技術代表団と共に訪日し、視察を行った。

科学技術代表団とは、1984年にIVAが開始した国王の主導による国際的な視察団で、技術、科学、産業に焦点を当てて視察を行ってきた。今回のテーマは、現代の日本と日本がその強みを生かす為の変革、そして、日本が立ち向かう新しい課題についてである。

「日本には国際的な成功、高品質追求、安全性への配慮といった感心すべき企業家精神の文化がある。スウェーデンは日本から学ぶ事が多い。」とレイフ・ヨハンソン科学技術代表団長兼IVA理事長は述べている。

2月16日、東京に到着後、代表団は東京スカイツリーを訪れ、東京のような地震の影響を受けてきた場所に、如何に高い建造物を建てる事が可能になったのか、技術的な説明を受けた。同日午後、駐日スウェーデン大使館投資部による日本の市場や貿易に関する講演を聴いた。夜はマグヌス・ローバック駐日スウェーデン大使の主催する夕食会に参加した。

2月17日、日立製作所、東京大学、東京女子医科大学を視察した。日立製作所ではビジネスや技術、戦略における取り組みの紹介を受けた。東京大学では、「福島原発事故後のエネルギーの研究－技術と連携」、「研究とイノベーションシステム－孵卵器、商業化と連携」、東京女子医科大学では、「細胞シート工学の可能性－未来の活用とビジネス」をテーマに視察を行った。

2月18日、日本科学未来館を訪れ、ロボットと宇宙に関する展示を視察した後、日本の報道関係者向け記者会見を開催した。同日午後、富士フィルム、キャノンを訪問した。富士フィルムでは、「フィルムから技術革新を駆使したハイテク企業へー未来の成長市場」、キャノンでは「新しいビジネスを発展させるー未来の成長市場」をテーマに視察を行った。夜は招待客を交えての夕食会を開催し、グスタフ国王から中西友子東京大学教授に、IVA会員証が手渡された。

2月19日、名古屋へ移動し、三菱航空機、トヨタ自動車を訪問した。三菱航空機では「旅客機MRJ90の製造」をテーマに視察を行い、トヨタ自動車では、ハイブリッドカーMIRAIの試乗、トヨタ会館の見学を行った。同日午後、東京に戻り、総理大臣官邸において、安倍晋三内閣総理大臣と懇談した。グスタフ国王は、天皇、皇后両陛下より皇居・御所に招かれ、夕食を共にした。



日本科学未来館視察の様子
写真: Edvard Fleetwood瑞日基金事務局長

スウェーデン王室

<http://www.kungahuset.se/royalcourt/royalfamily/latestnews/latestnews/thekingvisitsjapanwiththeroyaltechnologymission.5.274e83ca152f4410091788.html>

IVA

http://1b873.http.cdn.softlayer.net/801B873/www.mycronic.com/globalassets/news-articles/pdf/_red.pdf

首相官邸

http://www.kantei.go.jp/jp/97_abe/actions/201602/19kondan.html

日本経済新聞

http://www.nikkei.com/article/DGXLASDG19HB4_Z10C16A2CR8000/

フィンランド：第6回日フィンランド科学技術協力合同委員会開催

2016年3月9日、東京において、桂誠外務省科学技術協力担当大使及びヤリ・グスタフソン・フィンランド雇用経済省事務次官の共同議長の下、第6回日フィンランド科学技術協力合同委員会が開催された。今回の合同委員会はサウリ・ニーニスト・フィンランド共和国大統領の訪日に合わせて開催され、日本側から内閣府、文部科学省、農林水産省、経済産業省等、フィンランド側から教育文化省、フィンランド技術庁等の代表者に加え、両国の関係機関が出席し、最近の科学技術・イノベーション政策を始め、北極研究、バイオエコノミー、クリーンテクノロジー、高齢化社会を中心とした健康・医療等の分野における具体的な研究協力活動の進捗、研究助成や研究交流を促進する枠組のあり方について情報・意見交換を行った。

科学技術・イノベーション政策のセッションでは、両国は、各々の最近の展開について情報を共有した。内閣府及びフィンランド雇用経済省は、それぞれの政府における科学技術・イノベーション政策の概要を説明し、より大きなイノベーションに向けて科学技術協力を更に促進する意欲を示した。文部科学省及びフィンランド教育文化省は、両国間における最先端の科学研究協力を高める両省及び関連機関の最近の研究活動やプロジェクトの重要性を強調した。

研究助成や研究交流を促進する枠組のあり方のセッションでは、日本学術振興会(JSPS)及びフィンランド・アカデミーは、1998年のMOU署名以来継続している、有意義な研究者交流及び国際共同プログラムに関する研究支援協力について満足の意を表明した。科学技術振興機構(JST)、フィンランド・アカデミー、フィンランド技術庁は、過去に行われた材料科学や、現在協力が行われている高齢者支援のための情報通信技術といった中核的な課題に取り組むことを目的としたMOUに基づく、国際科学技術共同研究推進事業(SICORP)の下における共同公募の活用に対する合意に満足の意を表明した。両ファンディング機関は、両国の高い資質を備えた研究者間の交流を発展させ、学術協力を促すための既存の枠組みの中で、協力を前進させる意図を確認した。

両議長は、1997年に発効した日フィンランド科学技術協力協定の下で開催された定期的な合同委員会に基づく両国間の科学技術協力の発展に満足の意を表明した。

外務省

http://www.mofa.go.jp/mofaj/press/release/press4_003067.html

フィンランド：研究基盤のデータバンクが開設

フィンランドの研究基盤データバンクが開設され、研究関連施設、設備、資料、研究に資するサービスの情報が、フィンランド語および英語で閲覧可能となった。

このデータバンクは、研究者、研究基盤サービス提供者、資金提供者のためのものである。目的は、情報閲覧可能な統合させた形でのサービス提供による、研究基盤の共同利用促進である。現時点では、データバンクは研究基盤に関する基本的な情報(責任機関、サービスの説明、使用年数、キーワード、カテゴリー、オープンアクセス状況、連絡先)を掲載している。

2015年、Academy of Finlandと教育文化省は、この研究基盤データバンクの開発を開始した。これは、フィンランドが2020年までに国際的に競争力の高い学術と、質の高い研究基盤に対する認識を得るという、2014年に採択された研究基盤に関する戦略に基づいている。

この実現のために、全ての研究基盤の長期開発、研究基盤のアクセスと共同利用の改善、それらの影響と重要性の評価が必要とされている。

サービスはまだ試験段階であり、更なる発展に向けた研究者と研究基盤サービス提供者の協働が続いている。

フィンランド教育文化省

<http://www.minedu.fi/OPM/Verkkooutiset/2016/02/tutkimusinfrastruktuurit.html?lang=en>

フィンランド：研究結果活用促進のための資金提供プログラムが2016年4月に募集開始予定

2016年4月、Academy of Finland (AF)は、研究結果の活用促進を視野に入れたプログラムの募集を開始する。このプログラムは、フィンランド政府の戦略プログラムに起因するものであり、研究の質と影響力を高めること、研究結果のエンドユーザーと受益者の積極的な協力を促進すること、若手研究者によるトップレベルの研究と研究結果活用の機会を促進することを目的としている。また、研究結果を活用する研究の支援、国際的、機関をまたがる研究者交流の支援も目標としている。

プログラムは、AF、AFに相当する外国の資金提供機関、欧州研究評議会(ERC)のような国際的資金提供機関によるピアレビューでプロジェクトが高評価を受けてきた研究者が申請することができる。申請資格があるのは、2015年中、または2016年のプログラム募集終了までに資金提供を受けた研究者、資金を獲得して学術研究を行うフェローまたはポストドク研究者である。資金の重複受給は認められていない。

支援額は1つのプロジェクトあたり、2年間で最大30万ユーロ(約3千7百万円)である。資金提供期間は2016年10月1日から2018年9月30日までで、プログラム全体の予算は3千万ユーロ(約37億円)である。資金は、研究者が研究を行うフィンランド国内の機関に対して支払われる。

Academy of Finland

<http://www.aka.fi/en/about-us/media/press-releases/2016/suomen-akatemiaalta-karkihankerahoitusta-tutkimuksen-hyodyntamisen-edistamiseen/>

ノルウェー:ノルウェー科学技術大学とベルゲン大学、日本での活動を強化

ノルウェー科学技術大学(NTNU)とベルゲン大学(UiB)は、研究・教育面における日本との協力関係を強化するため、共同でイノベーションノルウェー東京事務所(駐日ノルウェー王国大使館通商技術部)内に専任のアドバイザーを採用し、2年間の予定で新たな体制による活動に取り組む。

その具体策は以下のとおりである。

- ・NTNU およびUiBと日本の提携先との関係の強化
- ・日本の各機関に関するアドバイスおよび情報の提供
- ・研究者、学生および経営者のための交流の場を創出
- ・NTNUおよびUiBと日本の大学との間の学生・職員の交流促進
- ・研究・教育活動と産業界の連携

NTNU は、物理学、数学、神経科学、エネルギー、環境、材料科学、国際政治といった分野で、日本の大学と長年に亘り提携してきた。また、独自の日本研究プログラム「ジャパン・プログラム」があり、2003年より「環境とエネルギーにおける京都国際フォーラム(KIFEE)」を率いてきた。

UiBは現在、言語学、気象、海洋、エネルギー、極地研究の分野で日本の大学と提携しており、今後はさらに保健科学や社会科学、法律といった新たな領域での協力関係の発展を目指している。

駐日ノルウェー大使館

http://www.norway.or.jp/norwayandjapan/culture/education/uib_ntnu_japan2015/#.VrpiWFhunIU

ノルウェー:高等教育機関の統合

2016年1月1日付で多くの高等教育機関の統合が行われた。この構造改革は、高等教育と研究の質向上を目的としている。

統合された高等教育機関は以下のとおりである。

- ・**トロムソ大学—The Arctic University of Norway**: トロムソ大学—The Arctic University of Norway, Harstad University College, Narvik University Collegeが統合した。
- ・**Nord University**: The University of Nordland, Nord-Trøndelag University College, Nesna University Collegeが統合した。
- ・**ノルウェー科学技術大学(NTNU)**: NTNU, Gjøvik University College, Sør-Trøndelag University College, Ålesund University Collegeが統合した。
- ・**University College of Southeast Norway**: Buskerud and Vestfold University College, Telemark University Collegeが統合した。
- ・**VID Specialised University**: Haraldsplass Deaconess University College, Betanien University College, Diakonhjemmet University College, the School of Mission and Theologyが統合した。

Torbjørn Røe Isaksen教育・研究大臣は次のように述べている。「高等教育機関の統合は、高等教育と研究の質向上を見込んでのことである。ノルウェーが今後必要となる再編成に成功するには、それは不可欠である。」

ノルウェー教育国際協力センター(SIU)

<http://siu.no/eng/For-the-media/News/Major-changes-in-the-higher-education-sector-in-Norway>

ノルウェー: Quota Schemeに代わる新プログラムの開始

ノルウェー政府は、2016/17年度より、Quota Schemeの募集停止を決定した。その代わり、新しいプログラムが開始される。

Quota Schemeとはノルウェー政府による発展途上国、中欧、東欧、中央アジアからの留学生に対する資金面での支援であり、その目的は、学生が母国に帰ったときに利益をもたらす教育を提供することである。

Bjørn Haugstad教育・研究副大臣は次のように述べる。「Quota Schemeでは、多くの発展途上国の学生がノルウェーで教育を受けるための支援をしてきた。そして、多くのノルウェーの学術機関はその恩恵を受けてきた。しかし、このプログラムは弱点も持ち合わせていた。それゆえ我々は考えを新たに、Quota Schemeに割り当てられてきた資金をより目的に合う方法で使う必要がある。」

新しいプログラムの主な目的は、学術面での相互協力を通じて、高等教育の質と国際性を向上させ、それによって発展途上国の競争力向上に寄与することである。

Haugstad副大臣は、学生交流も新しいプログラムの重要な要素となることを強調した。これは、主に1または2セメスターの交換留学によって成し遂げられる。目標は、少なくともQuota Schemeと同数の学生にノルウェーに来てもらうことである。Quota Schemeとの主な違いは、学生が直接奨学金に申請をすることができない点である。

ノルウェー教育国際協力センター(SIU)は、2017年から9千万ノルウェークローネ(約11億円)の財源で行う5年間プロジェクトへの募集開始を2016年に計画している。

ノルウェー教育国際協力センター(SIU)

<http://siu.no/eng/For-the-media/News/The-quota-scheme-to-be-discontinued>

[http://siu.no/eng/Publications/Publication-database/\(view\)/391](http://siu.no/eng/Publications/Publication-database/(view)/391)

デンマーク: Horizon2020より3億ユーロ獲得

2014年1月のHorizon2020*開始以来、デンマークの研究者、企業は455のプログラムに着手し、全体で3億ユーロを獲得した。また、デンマークがHorizon2020から受けた資金の割合が、2015年3月から11月にかけて2.3%から2.57%に上昇した。

Esben Lunde Larsen 高等教育・科学大臣は次のように述べる。「この割合増加はデンマークの研究者、企業にとって、とても良い結果である。これからは高水準の持続に焦点を当て、国中の企業のEUからの資金獲得への意識向上を支援すべきである。資金は国全体の企業成長、とりわけ雇用の増加に繋がる。」

Horizon2020は3つの柱で構成されている。“Excellent Science”と“Societal Challenges”の柱ではデンマークの割合が高く、それぞれ2.83%と3.47%である。しかし、“Industrial Leadership”では、デンマークの割合が低く、1.39%である。

デンマークにおけるHorizon2020への参加率の影響に関する新しい分析では、企業、その他の利害関係者はHorizon2020へ参加することで有益な経験をしていることが判明した。そこで、高等教育・科学省は、利害関係者のHorizon2020からの資金獲得に対する意識向上、学術機関と企業間の情報交換強化を目的として、Horizon 2020-NETというネットワークを実施した。

*Horizon2020: 2014年から7年にわたり総額約800億ユーロ(約10兆円)の資金助成する欧州連合(EU)の事業で、EUのこれまでの研究・技術開発枠組み計画の中で最大規模を誇る。多国間研究開発・イノベーション促進プロジェクトで、産業と学術研究を結びつけることを狙いとしている。

デンマーク高等教育・科学省

<http://ufm.dk/en/newsroom/press-releases/2015/eur-300-million-to-denmark-from-eu-research-and-innovation-programme>

デンマーク: Klaus Bock教授が欧州研究評議会(ERC)のVice Presidentに就任

2016年1月1日、Klaus Bock教授が欧州研究評議会(ERC)*のVice Presidentに就任した。物理学および工学を担当する。

Bock教授はデンマーク工科大学で有機化学の博士号を取得。1970年から1988年まで、デンマーク工科大学准教授、1988年よりカールスバーグ研究所化学部門長および教授、1992年よりカールスバーグ研究センター長、2001年から2007年までResearch of Carlsberg A/S副社長、2004年から2012年までDanish National Research Foundation理事長、2005年から2013年までDanish National Advanced Technology Foundation副理事長、2009年から2011年までDanish Academy of Technical Sciences会長を歴任した。2010年よりStanding Selection Committee for the Network of Centres of Excellence in Canada会員、2013年2月よりERC Scientific Councilの会員を務めている。

Vice Presidentとして、ERCの世界レベルの研究に関する戦略実現、Scientific Councilによるプログラムの実施監督に関わる。

*欧州研究評議会(ERC): ヨーロッパ全土における最先端研究を対象とした研究資金助成機関として2007年に設立された。競争的資金によりヨーロッパにおけるハイレベルな研究を促進することや、研究者主導による卓越した最先端研究を支援することを目的としている。

デンマーク高等教育・科学省

<http://ufm.dk/en/newsroom/news/2015/dane-appointed-vice-president-of-the-european-research-council>

ERC
<https://erc.europa.eu/organisation/bock-klaus>

ラトビア: Karlis Sadurskis氏が教育・科学大臣に就任

2016年2月、Karlis Sadurskis氏が教育・科学大臣に就任した。

Sadurskis大臣は、リガ工科大学で数学博士号を取得。1982年から2006年リガ工科大学に勤めた。2002年から2004年教育・科学大臣、2006年から2011年国会議員、2009年から2010年国防大臣政務官、2011年から2014年欧州議会議員を歴任した。2006年から現在に至るまでリガ工科大学教授、2014年から現在に至るまで国会議員、統一党分派副党首、財務金融委員会長、歳出見直し委員会委員を務めている。

ラトビア教育・科学省

<http://www.izm.gov.lv/en/highlights/1584-karlis-sadurskis-new-minister-of-education-and-science>

“KI Bladet” ～2015 NO.4～

ストックホルム研究連絡センターがオフィスを置くカロリンスカ医科大学 (Karolinska Institutet) では、“KI Bladet”という学内誌を発行しています。誌上で提供されている内容の一部を紹介いたします。

KI Bladet <http://ki.se/nyheter/ki-bladet-karolinska-institutets-personaltidning>

ハムステン学長によるプロローグ

ハムステン学長は、誰もが現在起きていることの影響を受けていることに触れ、大学の価値、先見性を重要視し、次のように述べた。

我々は秋、政府の研究改革法案に対する意見書作成に尽力した。もし政府が、幸先の良い研究方針に執着し、改革と自律性に対する一律の継続的投資をするのであれば、カロリンスカ医科大学 (Karolinska Institutet) は大いに発展し、国際ランキングで上位に位置する大学としての役割が強化されるだろう。

意見書には、次の10年、研究、イノベーション、教育の予算増額が必要とされるだろうことを記載した。研究機関が明確な役割を果たすために、予算の効果的活用も求められている。スウェーデンは小さな国であり、限られた数の世界をけん引する大学にしか投資することができない。一握りのスウェーデンの大学だけが長期にわたり国際的に優れた地位を維持することができる。そしてカロリンスカ医科大学はその一つである。

Stockholm County Councilは、我々の最も重要なパートナーである。1年以上かけて、新しい協定を作り上げた。それは、大学と大学の健康管理部門は今以上に融合されることや、両者の明確な役割分担を規定する。

10月初旬に、2015年ノーベル化学賞受賞者の1人であるTomas Lindahl教授が、医学部生としてのキャリアをカロリンスカ医科大学で開始し、彼の最初のDNA修復メカニズムの発見がここで成されたことが報じられた。これは計り知れないほどの喜びと誇りである。



写真: ハムステン学長
(KI Bladetより転載)

高等教育の国際化をテーマとした講演

2015年の教員の日は9月30日であり、カロリンスカ医科大学 (Karolinska Institutet) 名誉教授Hans Roslingをはじめとする講演者が、満席の講義室に向けてプレゼンテーションを行った。今年のテーマは高等教育の国際化であり、約200人の聴衆が集まった。講演者の多くは、教育の国際化は、文化および価値観のことであり、大学と医療は、人々の移動の影響を受けていることや、世界的な健康問題を国内外の観点から考えることの重要性が議論された。



写真: Rosling 名誉教授 (KI Bladetより転載)

カロリンスカ大学病院の再編成

カロリンスカ大学病院の再編成により12名のマネージャーが交代し、カロリンスカ医科大学 (Karolinska Institutet) の研究者、教員が主要な地位を占めることとなった。学術的展望、研究、教育を確保することが目的である。新しい組織はテーマに基づいて組織され、医療従事者はチームで働くことになる。

病気との戦いはまだ終わっていない

2015年ノーベル生理学・医学賞の受賞理由となったアルテミシニンとアベルメクチンの発見により、マラリア、河川盲目病、象皮病から多くの命が救われたが、病気との戦いはカロリンスカ医科大学 (Karolinska Institutet) でもまだ終わっていない。年間50万人がマラリアに罹患していると推測されるが、マラリアが蔓延している地域の年長の子供と大人は、病気に対する免疫をつけており、患者の大半が乳幼児である。2050年までに病気を根絶することを目指しており、それは膨大な仕事だとMats Wahlgrenカロリンスカ医科大学教授は述べている。

※ハムステン学長は、2016年2月13日付で辞任した。

イベント予定

セミナー・シンポジウムの開催について随時ホームページでお知らせしています。ストックホルムセンターHPをご覧ください。最新情報をご希望の方は以下URLから登録してください。
<http://www.jsps-sto.com/contact.aspx>

2015年度第2回IVA-JSPSセミナーの開催

スウェーデン王立工学アカデミー(IVA)、瑞日基金、在スウェーデン日本国大使館、JSPSストックホルム研究連絡センターの共催で、IVA-JSPSセミナーが開催されます。

日時 : 2016年3月21日(月)
会場 : スウェーデン王立工学アカデミー(IVA)
講演者 : 中曽 宏 日本銀行副総裁
モデレーター : Klas Eklund SEB Senior Economist
Robert Stenram 瑞日基金前副会長への追悼の辞
: Edvard Fleetwood 瑞日基金事務局長
コメンテーター : Stefan Ingves The Riksbank (スウェーデン国立銀行) 総裁

事業のご案内

二国間交流事業(共同研究・セミナー)

本事業は、個々の研究者交流を発展させた二国間の研究チームの持続的ネットワーク形成を目指し、我が国の大学等の優れた研究者(若手研究者を含む)が相手国の研究者と協力して行う共同研究・セミナーの実施に要する経費を支援します。

<http://www.jsps.go.jp/j-bilat/semina/jrss.html> (日本語版)
<http://www.jsps.go.jp/english/e-bilat/index.html> (英語版)

外国人研究者招へい事業

(Fellowship Programs for Overseas Researchers)

本事業は、諸外国の優秀な研究者を招へいし、我が国の研究者との共同研究、討議、意見交換等を行う機会を提供することにより、外国人研究者の研究の進展を支援すると同時に、外国人研究者との研究協力関係を通じて、我が国の学術研究の推進及び国際化の進展を図ることを目的とした事業です。

平成28年度採用分募集要項をJSPSのHPにて公開中です。

<http://www.jsps.go.jp/j-fpo/index.html> (日本語版)
<http://www.jsps.go.jp/english/e-fpo/index.html> (英語版)

その他

カロリンスカ医科大学(Karolinska Institutet) 同窓会 会員募集

KIでは過去・現在問わず、在籍されていた方々のためにKI Alumni & Friendsを設立し、様々なイベントの企画、メールマガジンによる情報提供を行っています。KIに在籍した事があり同窓会に関心がある方は是非以下のホームページを御覧ください。

<https://www.network.alumni.ki.se/portal/public/Default.aspx?AcceptsCookies=yes>

JSPS Stockholm Newsletterの定期購読について

ニュースレターの定期購読を希望される場合、1. 氏名、2. 所属機関・部署、3. メールアドレスを jspsto@jspsto.com までお送りください。電子メールにて配信します。



表紙写真: イースターのお菓子

イースターが近づくにつれ、イースターエッグを模したお菓子や雑貨が増え、街を彩り豊かにしている。

(撮影 村上道子)

JSPS Stockholm Newsletter 第49号

編集長: 川窪 百合子

編集: 村上 道子

発行日: 2016年3月18日

発行元: 日本学術振興会ストックホルム研究連絡センター

連絡先: JSPS Stockholm Office, Retzius väg 3, 171 65 Solna, Sweden

Phone: +46 (0) 8 5248 4561

Website: <http://www.jspsto.com/> E-mail: jspsto@jspsto.com

JSPS
STOCKHOLM